

舞鶴市糸井文庫蔵『新ばん うらしまたまでばこ』翻刻・語釈・抄訳および英訳

英訳

畠恵里子¹・荒川吉孝²・原豊二³・西野由紀⁴・園山千里⁵・小室智子⁶・吉野健一⁷・小山元孝⁸

要旨：本稿は、舞鶴市が所蔵している糸井文庫の『新ばん うらしまたまでばこ』を対象として、翻刻・語釈・抄訳・英訳を付し、国内外の研究者に資するようにした試案である。

キーワード：糸井文庫、浦島伝説、豆本

1・はじめに

舞鶴市糸井文庫蔵『新ばん うらしまたまでばこ』（上巻欠・下巻のみ）を取り上げ、翻刻に加え、語釈・抄訳・英訳を施した試みである。基礎的翻刻を小室・吉野・小山が、近世文化を踏まえた翻刻の再検討・語釈を西野が、抄訳を畠が、英訳を荒川が担当した。翻刻・抄訳において原・園山が意見を提示し、英訳において園山が意見を提示した。全作業において西野が意見を提示した。なお、いれを漢字もしくはかなと判断するかは、無論、読者の権利である。

2・翻刻・語釈

【凡例】

- 翻刻にあたり、かな遣いは原則として原文にしたがい、句読点および濁音・半濁音については適宜ほどこした。
- 原文にふりがながある場合はすべて付し、さらにこんにちの一般読者の便宜のために必要であると判断したものにはふりがなを付した。
- ふりがなについてはそれぞれ語の直後の（ ）内に記した。
- 原文に促音・拗音がある場合はすべて小さく表記した。
- 原文が漢字表記の場合であってもひらがなに改めたものもある。また、原文がひらがな表記の場合であっても漢字に改めたものもある。
- 漢字の字体や送り仮名の用法は、こんにち的一般的なものにできるかぎり近

づけた。

- 繰り返しをしめす踊り字（く、ゝなど）はそれもとの字に置き換えた。
- 改行やカギ括弧は適宜ほどこした。
- 底本は舞鶴市糸井文庫を使用した。

●（表紙裏）『新ばん うらしまたまでばこ』（下）

（一丁表）

相談きわめ、「生肝なくては役に立たず」と猿を亀に送らせ、日本へ帰しける。

1 舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 准教授

2 舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 特任教授
3 ノートルダム清心女子大学 文学部 准教授

4 天理大学 文学部 准教授
5 ポーランド国立ヤギエロン大学 文獻学部東洋学研究所 准教授

6 舞鶴市郷土資料館 学芸員
7 京都府立丹後郷土資料館 学芸員

8 京丹後市役所 職員・兵庫県立大学大学院 地域資源マネジメント研究科 博士後期課程二年生

【語釈】 ○相談きわめ 本書は上巻欠のため、前半の内容、「相談」の詳細については不明。下巻の内容からみて、亀と門番である蛸、海月が、生肝はもといた山にあるという猿のことばを受けて如何にすべきか相談していると推測される。
 ○生肝 生きている動物の肝で、薬用にすれば特効があるとされた。
 ここでは猿の生肝をさす。猿の生肝を得ようとする類話として、『今昔物語集』巻五第二十五話「亀為猿被謀語」や『沙石集』巻第五本ノ九「学生なる蟻と蛹との問答」などがあるが、浦島伝説とのつながりはみられない。

(一丁裏)

猿は亀を謀(たばか)り、日本へ帰り、「肝をやらん」と仲間の猿を集め、「我を龍宮連れ行き、生肝を取らんとしたり、思い知れ。」と大勢の猿集まりて、亀をぶつやら蹴倒すやら、思ふままに打擲(ちやふ・ちやく)

【語釈】 ○打擲 打ちたたくこと。なぐること。

(二丁表)

しければ、亀は「こは敵(かな)はじ。」と命からがら海へ飛び込み、龍宮逃げ行きけり。

〔このくそ亀に、どふさるかみろ
へ亀うこつしやアねへ、ぶち殺して煮て喰つてしまゑ、かさの薬だア〕

【語釈】 ○命からがら やつとのことで。身にふりかかった生命の危険を逃れてからふり返った時、そこにほんと余裕がなかつたさまにいう。
 「くそ」は卑しめ罵る意を添える接頭語。ここでは亀に騙されたことを知った猿が亀を罵っている。
 ○どふさるか どのようにされるか。
 皮膚病の薬。

(二丁裏)

亀はほふほふの体にて龍宮へ帰り、行き着きあへず申けるは、「我、日本に参りしに、猿大勢集まり打擲いたし候。」と申ければ、「それはそれは、亀益体(やく・たい)もない。」
 【語釈】 ○ほふほふの体 やつとのことで。さんざんな目にあい、あわてて逃げ出すさまをいう。
 ○益体もない 役に立たない。

(三丁表)

〔四丁裏〕
 浦島は龍宮へ着き、乙姫に對面し、いろいろと意見を加え、「これは我が形見なり。」と面向不背の玉を形見に譲り、これは玉の威徳にて、乙姫の病氣快氣し給ふ。「我も玉の代わりを贈らん。」と、玉手箱を遣はされけり。「この箱を開けることなかれ。」と断り、別れを惜しみ、浦島は亀に乗り

【語釈】 ○面向不背の玉 前から見ても後ろから見ても表裏がなく美しく見える玉。ここでは幸若舞「大織冠」や謡曲「海人」に登場する藤原鎌足が唐の太宗から贈られたという宝物のひとつ「面向不背の玉」をさす。
 ○威徳 嶼か

門番の蛸と海月呼び寄せ、「猿を日本へ帰したる咎(とが)」により、筋骨(すじ・ほね)抜くべし。「と仰せられければ、大勢立ち寄り、蛸と海月の骨を抜きける。それ故、今に蛸、海月骨無きこと、この因縁と知られけり。亀は猿を帰したる咎により、勘当の身となりにけり。

【語釈】 ○蛸、海月骨無きこと、この因縁と知られけり 「猿の生肝」(「海月骨なし」とも)と題する昔話にちなみ、「因縁」とするか。龍宮の乙姫が病気になつたため猿の生肝を求め、その使者である海月は猿を誘い出すも途中で気づかれ、失敗する。龍宮でその制裁をうけたために、海月は骨がなくなつた。また、海月にかわり、蛸や海鼠が登場するパターンもある。

(三丁裏)

カメは勘当の言いつけと日本へ来たり、浦島が釣り針にかかり、「我は龍宮の使いなり。乙姫、浦島殿に恋煩い、何卒龍宮へ行き給い、意見下されなば、病氣も治り、我もそれを功に勘当の詫び。」ひとへに頼みければ、浦島も不憫に思ひ

【語釈】 ○恋煩い 恋しく思うあまりに起ころる、悩みや気分のふさぎ。

(四丁表)

「すぐさま龍宮へ行かん。」と言へば、亀は嬉しく甲羅に乗せて、龍宮指して急ぎ行く。
 〔四丁裏〕
 浦島は龍宮へ着き、乙姫に對面し、いろいろと意見を加え、「これは我が形見なり。」と面向不背の玉を形見に譲り、これは玉の威徳にて、乙姫の病氣快氣し給ふ。「我も玉の代わりを贈らん。」と、玉手箱を遣はされけり。「この箱を開けることなかれ。」と断り、別れを惜しみ、浦島は亀に乗り

【語釈】 ○面向不背の玉 前から見ても後ろから見ても表裏がなく美しく見える玉。ここでは幸若舞「大織冠」や謡曲「海人」に登場する藤原鎌足が唐の太宗から贈られたという宝物のひとつ「面向不背の玉」をさす。
 ○威徳 嶼か

でおかしがたい徳。

(五丁表)

日本へ帰りける。亀もこの度の手柄にて、勘当御免下されける。

【語釈】○手柄 功績をあげること。

(五丁裏)

それより龍宮には、この玉を高さ三十丈の玉塔に籠め置きしが、年経て大臣淡海公、海女人を龍宮へ遣はし、遂に日本へ渡りける。今に讃州に海女の里、珠島と古跡あり。この里の海女、玉を取返したる所也。

【語釈】○玉塔 玉で飾つた塔。

○淡海公 藤原不比等のこと。

○海士人 を龍宮へ遣わはし

藤原不比等が、讃岐国志度浦房前の海人に、龍王に奪われた面向不背の玉を取り返させたという玉取伝説が下地となつてゐる。謡曲「海人」では、「今の大臣淡海公の御妹は、唐土高宗皇帝の後に立たせ給ふ。さればその御氏寺なればとて興福寺へ三つの宝を渡さる。華原磬泗浜石、面向不背の玉、二つの宝は京着し、明珠はこの沖にて竜宮へ取られしを、大臣御身をやつし、この裏に下り給ひ。賤しき海人乙女と契りをこめ、一人の御子を儲く。今の房前の大臣これなり。」「その時海人びと申すやう、もしこの玉を取り得たらば、この御子を世継の御位になし給へと申ししかば、子細あらじと領掌し給ふ。」としている。

○珠島 讃岐国志度浦にあつたとされる島。

また、志度浦は別名を玉浦ともいう。

3・抄訳

※本書は、上巻が欠落しているため、全体像や詳細は不明である。

※ただし、下巻の内容からみて、猿の生き肝を入手しようとしている亀、門番の蛸、海月が、「自分の生肝はここにはなく、もといた山にある」と言う猿の言葉を受け、どうしようか相談していると推測される。

相談の結果、「猿の生き肝がなければどうしようもない。」と結論が出た。そこで、しかたなく猿を地上へと帰らせた。

地上へ戻った猿は、「では、私の生き肝をあげよう。」と亀へ述べた。だが、こつそりと仲間の猿たちを集めておき、「自分を龍宮へ連れて行つて、殺して、生き肝を取ろうとするとは。ええい、思い知れ。」と、大勢の猿たちで、亀を殴打したり蹴倒したりした。猿たちは、「このくそ亀め。」「亀なんぞぶち殺して食つちまえ、薬がわりだ。」などと罵り、攻撃した。

亀は命からがら龍宮へと逃げ帰り、「猿たちに暴力を振るわれた。」と話した。龍王は蛸と海月とを呼び寄せて、「猿の生き肝を入手できなかつたとは。では、その罪ゆえに、おまえたちの筋と骨とをすつかり奪つてしまおう。」と命じられた。そのため、蛸と海月には現在も骨がないのだ。そして、亀はといえば、猿を地上へとみすみす返してしまつた罪のため、追放されてしまった。

さて、追放された亀は地上へとたどり着いた。そして浦島に釣り上げられた。「私は龍宮の使者である。乙姫様があなたさまへ恋をして、悩んでおられる。どうか龍宮へおいでいただきたい。されば、乙姫様は平癒されようし、自分も面目が立つ。」と、懸命に頼み込んだ。かわいそうに思った浦島は快諾した。亀は歓喜し、浦島を甲羅に乗せて龍宮へと急ぎ向かつた。

浦島は乙姫と対面し、会話を交わした。浦島は、「これを私の形見に。」と、「面向不背の玉」を渡した。この宝玉には特別な徳があるため、乙姫は平癒した。そこで、「わたくしもこの宝玉の代わりに。」と、玉手箱を浦島へ贈り、決して開けてはならないと伝えた。浦島は亀に乗り、地上へと戻つた。そして、亀はこのたびの功績として追放処分を取り下げられた。

それ以降、龍宮では、この「面向不背の玉」を大切に宝塔に納めていた。後に、この宝玉の本来の持ち主であり、龍王に宝玉を取り戻して、地上へと持つていつたという。讃岐国には海女の住む珠島があるが、そこが宝玉を取り返した場所という。めでたし、めでたし。

4・**櫻痴**

Urashima's Casket: A New Version (The 2nd Part)

※ Since the first part is missing, the whole picture and the details of this Urashima story is unclear.

※ Based on the content of the second part, however, it is presumed that a jelly fish, an octopus who acts as a gatekeeper, and a tortoise are together seeking a liver from a living monkey. They are talking about what to do in response to the monkey's explanation that his liver can be found on the mountain from which he has come.

* * * * *

After the talk, they arrived at the conclusion that they couldn't do anything unless they obtain the liver. So they reluctantly allowed the monkey to go back to his home.

Having returned to the earth's surface, the monkey said to the tortoise, "I will give you my liver, then." But he had secretly gathered his fellow monkeys, and beat and kicked the tortoise with them, saying, "How dare you take me away to the Dragon Palace and attempt to kill me and get my liver! So have you learned your lesson?" The monkeys attacked the tortoise, shouting, "Damn you!" and "Let's kill the tortoise and eat it as medicine."

The tortoise ran for his life back to the Dragon Palace, and told those in the court that the monkeys had used violence toward him. The dragon king summoned the octopus and the jellyfish, condemned them for their failure to obtain a liver from a living monkey, and ordered that they should be deprived of all the bones and sinews in their bodies. This is why even today octopuses and jellyfish have neither bones nor sinews. As for the tortoise, he was banished because he could do nothing to prevent the monkey from returning to the surface of the earth.

Now the banished tortoise reached this world and was hooked by Urashima who happened to be fishing. The tortoise asked Urashima earnestly, "I am a messenger from the Dragon Palace. The Princess languishes in the palace, waiting for you in secret. Please visit her. She will then recover and I will also save my honour." Urashima took pity and gave ready consent. Overjoyed, the tortoise put Urashima on his back and hurried off to the Dragon Palace.

Urashima found the Princess and spoke with her. He offered her a gift of *menko-fuhai-no-tama*, or the wondrous stone in which the Buddha's face can be seen from any angle, and said, "Keep this as a memento."

The virtue of the stone cured the Princess quickly. "This is a mere token of thanks," said the Princess, and presented Urashima with a casket, adding that he should never open it. Mounted on the tortoise, Urashima returned to this world. His services having been recognised, the tortoise was released from banishment.

At the Dragon Palace, the precious stone was kept carefully in a pagoda. Because the rightful receiver of the stone was Fujiwara-no-Fuhito, posthumously referred to as Tankaikō, he later recovered it by sending an *ama*, or a woman diver, as his proxy to the Dragon Palace. Off the Province of Sanuki lies the Isle of Tamashima, or Gem's Island, where female divers live. It was a diver there who helped to recover the precious stone.

翻訳:糸井文庫の調査ねよる本稿くの掲載を許可した舞鶴市〈謹慎をあらわす。舞鶴市・立命館大学アーチ・ラガーナヤ〉、第一作成DB (*) 調査に当り、立命館大学教授・赤間亮氏〈謝意を表ひるべく。 (*)

[\(2019年1月最終確認\)。](http://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/maiduru/index.htm)

英文を校閲した舞鶴工業高等専門学校非常勤講師ダグラス・モリスキー氏
謝意を表ひるべく。

SHINPAN URASHIMA TAMATEBAKO (GÉ-KAN)
(URASHIMA'S CASKET: A NEW VERSION (THE 2ND PART))

Eriko HATA, Yoshitaka ARAKAWA, Toyoji HARA, Yuki NISHINO, Senri SONOYAMA, Tomoko KOMURO, Ken'ichi YOSHINO
and Mototaka KOYAMA

ABSTRACT: This article comprises a reprint of *Shinpān Urashima Tamatēbako* (*Gé-kan*) in the possession of Itoi Bunko (Itoi Library) in Maizuru City, with notes, an abridged modern Japanese version, and its English translation. We hope this will be helpful to researchers both at home and abroad.

Key Words: *Itoi Bunko, Urashima legends, Manehon (Miniature Book)*

